

～ 抄 録 ～

〔論 説〕

孔子の道德哲学論

—四徳（仁，義，礼，知）論を中心として—

浅井茂紀

この論説は、目次、Ⅰ序論、Ⅱ本論、第1節孔子の仁、第2節孔子の義、第3節孔子の礼、第4節孔子の知、第5節孔子のその他の徳、(1)孔子の信、(2)孔子の愛、Ⅲ結論、から成立している論文（注付）である。孔子の仁、義、礼、知とは何かを問題にしてみた。さらに、孔子のその他の徳として、信や愛とは何かを『論語』や『孟子』などの出典を提示して、その内容を分析や総合し問題にしてみた。また、中国春秋時代、孔子は、なぜそれら仁、義、礼、知、さらに、信や愛などの道德哲学（moral philosophy）を主張したのかを問題にしてみた。つまり、孔子の道德哲学は、人間としての根本的な理念（Idee）ではなかろうか、ということを経典（logos）的に体系付けて、その意義と価値を多少なりとも考察した論説である。

遺体が血を流して殺害者を告発した話

花田文男

殺害者がいると死体は血を流す、血を流して殺害者を告発することは中世人にとってはあり得べきことであった。古くから受け継がれた伝承、信仰であると同時に事実の認識であった。中世の歴史家はたびたびその事実を報告している。おそらく死者にも意思が存在するという信仰の名残りであろう。とりわけ非業の死をとげた者ほど強い意思、うらみが残った。このモチーフを文芸作品の中ではじめて用いたのは12世紀後半のクレチアン・ド・トロワである。『イヴァン（獅子の騎士）』では、イヴァンは致命傷を負わせた騎士を追ってかえって城の中に閉じこめられる。魔法の指輪によって姿の見えなくなったイヴァンの前を騎士の遺体を通ると、遺体から血が噴き出す。遺体から血が流れているのに、犯人が見当たらないことに周囲の者は不思議に思う。作者がどこからこの想を得たかは不明にしても、殺害者が自ら殺した者の葬列の場に居合わせざるをえないという状況がこのモチーフを用いさせた動機となったのではなかろうか。彼の追隨者たちは好んでこの主題を取り上げるが、師ほどの成功を収めることはなかったようだ。

lead と対応するドイツ語の動詞 leiten, Führen との比較

松本 理一郎

leiten と führen とは lead に意味的にほぼ対応するドイツ語の動詞である。いずれも中核的な意味は近似している。その場合 leiten は少し formal な使用域で使われ lead より用法が限られている。一方 führen は lead より多様な用法をもつ。その結果として bring, drive, run, send, show, take など別な動詞に相当する用法がある。literal な用法が対応しているゆえに、予想されることであるが、比喩的な用法においてもその対応が見られた。これは人間の共通体験つまり認知的枠組みに基づく比喩的拡張であると考えられるが、ヘブライ語、ラテン語などからの翻訳借用の可能性もある。また対応が見られない場合、英語では、同様の拡張が生じたが、既にその意味では使われなくなっている用法がある。またそうでない場合も、未だそのような拡張が起こっていないケースと考えることもできよう。この比較の結果、現代英語の lead の中核的な意味の特徴として、**Leader** と **Led** が異なるものでなくてはならないという特徴を加える必要性が明らかになった。

A Comparison of *Jane Eyre* and *Wide Sargasso Sea*

ELLIOTT, Warren R.

小説 *Jane Eyre* を執筆したシャーロット・ブロンテは多くの批評家によって話の筋及び登場人物の特徴を作り出したことに対し天才であると評された。*Wide Sargasso Sea* を執筆したジーン・リースも同じ理由で天才であると評された。しかしながら、この論文ではブロンテの作品が独自の傑作であるのに対してリースの作品が主としてジェーン・エアの模倣であることを示す。リースの作品を傑作と評するには二つの作品にはいくつもの同じ登場人物や出来事を含めあまりに多くの類似点がある。

**Southern Womanhood, the Racial Other,
and Amalgamation:
Death and Revivification of Two Beautiful
Women in E. A. Poe's "Ligeia"**

OHNO, Misa

本稿は、エドガー・アラン・ポーの短編小説「リジイア」の中に、人種に関する表象を見出し、それらを、白人女性崇拜、異人種間結婚への嫌悪、人類多原発生説への傾倒といった、アンテベラム期アメリカ南部の人種主義的な言説と比較検討することを目的とする。

「リジイア」には二人の対照的な美女が登場する。ロウィーナは、南部の白人女性の理想を体現する人物であり、リジイアは、その理想をことごとく拒否し、白人と異人種の混血児であることを暗示する人物である。理想的な白人女性は、南部の秩序と安定の象徴であったにもかかわらず、作品には、ロウィーナを憎悪し、リジイアの魅力に取りつかれる語り手が登場し、結末では、リジイアとロウィーナが合体する場面が描写される。

ポーは、アメリカで人種をめぐる議論が活発であったアンテベラム期に創作活躍をしたが、文学作品において、人種に関する問題を直接扱うことはほとんどない。彼を奴隷制擁護の南部人だとみなす批評家もいる。しかし、「リジイア」に潜んだ人種の表象を検討すると、ポーは作品において、人種主義的な言説を解体し、表面的な人種の差異によって明確な境界を定めることの無益さを描いたのではないかという結論に至る。

***The Hell, Emphatic Questions and Focus:*
with Special Reference to Extraction from WH-Islands**

OGURO, Takeshi

本論考では、WH-*the hell*句はWH島を越えられないという観察を扱い、Lasnik and Saito (1992)の主張を支持し、その原因はそれらの句が焦点素性照合のためにWH島内部でA'位置に立ち寄るためであると論じた。その際に、従来ほとんど注目されたことのない*What DID you buy?*などの強調疑問文を扱い、焦点移動を伴う諸言語の研究に基づき、このような疑問文における文頭に移動したWH句が焦点句でもあると論じ、その振る舞いを検討した。

あわせて、問題点として、WH-*the hell*句の抽出に強い逸脱性を見いださない話者がいることや、焦点移動を伴っていると思われるが強い島の効果を示さない感嘆文の例を示した。これらは、Bošković (1998) の仮定に基づき、焦点移動には主要部の要請によるもの場合と移動する句自体の要請による場合があるとするにより導かれると論じた。さらに、WH 島の効果に関する項／付加詞の非対称性の原因についても考察した。

グリムの『子供と家庭のメールヒェン集』の結末句について

塩 谷 透

メールヒェンの最後にはいわゆる「結末句」が置かれることが多い。この句の機能をグリムの『子どもと家庭のメールヒェン集』を例にして考察する。

他の物語には見られない、この結末句の働きは、語りの終了を告げることで、物語の世界と現実とを明確に区分することにある。結末句の中には、物語られたことの信憑性を否定するようなものも存在するが、これも聞き手を、時間と場所を特定することのできない虚構の世界から現実の世界へと連れ戻すためのものである。

またこれには「語り手」の存在も関わっている。元来、メールヒェンは語られるものであり、語り手を必要とする。その語り手に要求されるのは、非現実的な内容を素直に信じ、共感してみせることである。つまりメールヒェンを語る者は、そのような本来の自分ではない者を演じなければならない。物語の信憑性を疑う結末句は、その虚構の役割を演じていた者が、現実の人間へと戻るための仕組みでもある。

時習館学規第六条について

朱 全 安

江戸時代中期の宝暦五年（一七五五年）、熊本藩に創設された藩校時習館の初代教授秋山玉山が撰した「時習館学規」中、漢籍の読み方を規定した第六条「書須背誦誦須華音否則四声不明同訓相混字位或易語助或脱不足以供文辞之用和読之陋也故書必背誦誦必華音而後齋楚合焉彼此一焉是処之莊嶽之間之術也立漢語之師」を取り上げ、これにより、長い間伝統的な漢文訓読法による漢文教育が行われてきた中で、中国語音に基づく漢文直読法による漢文教育が、学校教育の中に取り入れられたことを論じた。漢籍の読解方法について、中国語で書かれた漢籍を日本語として読むゆえに弊害を生む伝統的な漢文

訓読法を退け、外国語文献を読む本来の方法に則り、中国語で書かれた漢籍を中国語の発音と文法によって読もうとする漢文直読法を、藩校教育の現場で明確に規定し、提唱した意義は大きい。

アテナイとイアソス：前412-394年/IG II² 3の再構成

師 尾 晶 子

本論文では、イアソス出土のヘレニズム時代の碑文 (Iasos 3926) によって新たにもたらされた IG II² 3+IG II² 165に関する知見をもとに、碑文の新テキストを紹介するとともに、この碑文の決議年代が前394年ごろであること、およびその歴史的背景を考察した。顕彰された3名のイアソス人亡命者は、おそらく前412年以來、アテナイに身を寄せていたが、小アジア解放戦線にアテナイの将軍とともに加わって力を尽くしたものと思われる。彼らは、前394年に小アジアが開放され、イアソスが解放されると、アテナイから顕彰され、アテナイの保護のもと祖国にもどることに成功した。

The author examines a new text of IG II² 3+IG II² 165, recently published by Fabiani, Habicht and Culasso Gastaldi, and considers its historical background and circumstance. This is an honorary decree for three Iasians, Anaxagoras son of Apollonides, and Artemon and Kydias, sons of presumably Eumachos. The date of the decree is thought ca. 394 BCE through the analysis of Iasian situation at that time. The three Iasians were presumably expelled from Iasos in 412 BCE and fled to Athens. They acted with Athenian generals who fought against the Spartans, and after the success of the liberation of the Greeks in Asia Minor in 394 BCE, they succeeded to return to their homeland Iasos and were honored as *proxenoi* of the Athenians.

Theatre Research from the Viewpoint of “Memory”⁽¹⁾
Toward Construction of a “Theaterwissenschaft”
in the Context of Cultural Studies

YAMASHITA, Yoshiteru

First, this paper aims to survey a body of research works on “memory” in the context of cultural studies both in Japan and Germany. Second, it tries to find out an appropriate orientation for theatre research if this special field of “old” human science should be explored in a new key of “memory”.

In contrast to the classical study of Frances Yates', who excavated “ars memoria” from the antiquity to the renaissance, recent researchers are more interested in such aspects of memory as the constructedness, the elasticity, the context-boundness, and the sociality: “memory” as “vis” (force).

However, at the same time, a certain problematic nature of “memory” is also pointed out: “memory” as a traumatic past which does not allow to be represented in any sort of media. Thus it should be said that a deep chasm runs through the universe of “memory”- discourse in cultural studies.

My suggestion is that this very dilemma in the “memory”- discourse is the reason why “authentic” historical dramas do not suffice any more for performing the past, and why new “memory”- theatres must be created.

Laboratory Experiments on Solute Transport in
a Variably Saturated Macro-porous Medium

SUGITA, Fumi

KISHII, Tokuo

ENGLISH, Michael

Effects of macropore flow on solute transport in a variably saturated medium under repetitive rainfall events were investigated by rainfall-infiltration experiments. The effects of macropore flow were classified into three categories depending on rainfall amount relative to evaporation and storage change during a period of interest. Macropores were found to contribute to faster infiltration under heavy

rainfalls, while they contribute to larger vertical dispersion in all rainfalls including light rains which do not initiate macropore flow. Rainfall intensity has an influence on the onset of the macropore flow. Macropore flow in high antecedent soil water content conditions causes greater vertical spreading of the solute due to small lateral infiltration from macropores into matrix. The effects of macropore flow on solute transport in the variably saturated medium were most apparent under intermediate strength rains in our experimental conditions.

歴史・対話・街の創出

—市川オープンミュージアム構想—

Invention of Public History and Dialogues for Community Development

—The Project of Open Museum: Ichikawa—

山 口 徹

湖 沢 順

都市は多様な立場の人びとが行きかう空間である。さまざまな主体が世代や関心の相違をこえて共有しうる対象の1つは、その人びとが生活・活動し、あるいは訪れる場そのものである。特定の場所を共有できた人びとは、他者が「生きる／生きた」異なる時間（個人史）へ関心をいただくことになるかもしれない。「オープンミュージアム」とはまさに、こうした個人史の絡み合いからパブリックヒストリーを創出してゆく過程で、主体間に対話を生み出す街づくりの仕掛けである。人びとの関心を特定の場所に惹きつける手法として、過去に刻まれてきた場所の歴史を発見・再発見する街歩きをまずは提案したい。そのためには、街のなかから集められた具体的な素材を活かしながら、多くの人びとが関心をもつ学習テーマを設定しなければならない。本論では市川市北西部をサンプル地域として取りあげ、文化景観の形成史を提示する。文化景観はそれ自身、自然の営力と人間の営為の絡み合いから生まれる歴史的産物であり、自然科学や人文社会科学といった学問分野の境界を超克するテーマとなりうるからである。次に、人びとに「発見」を促すためには、各場所で適切な情報（たとえば、過去に撮影された写真や解説文）を提供する仕組みが必要となる。ここでは、携帯電話のインターネット機能とQRコードの利用を組み合わせた情報の受信システムを提案する。

Cities are the space where various individuals come across. What the people share, in spite of all the possible differences, is the place where they live, act or visit. If the people have frequent opportunities for dialogues with those who share the place,

they will come to be interested in the ‘personal histories’ of others. The ‘Open Museum’ is a scheme of community development to generate dialogues, lacking in modern cities, by inventing a shared or ‘public history’ of its place through the entanglement of their personal histories. In order to encourage various inhabitants and visitors to be interested in specific places, the ‘Open Museum’ organizes heuristic tours through which the participants can discover and rediscover the past engraved on the spots. First, those tours should embody interesting themes built on specific topics and materials collected by fieldworks. The northwestern part of Ichikawa City, Chiba Prefecture of Japan, is presented here as a sample area, and we would like to provide a theme on its cultural landscape, which in itself is a historical product of the entanglements of activities, the human and natural. Secondly, in order to offer the proper information at the right spots to the participants in the tour, we would like to propose the usage of cellular phones accessible to the Internet and the recent-explored ‘QR Code’ as a device for receiving the prepared data associated with each spot -e.g. pictures taken there in the past.

Do Types of Output Activities Influence Learners’ Acquisition of Accurate Grammatical Forms?

ONODA, Sakae

This study investigated the effects of two kinds of output tasks on the acquisition of grammatical forms by Japanese university students in a communicative language teaching (CLT, hereafter) context. Unlike the inductive grammar learning stressed in CLT, explicit grammar teaching has recently been claimed to be effective in improving grammatical accuracy. However, this approach to the teaching of grammar needs to be reinforced by follow-up output tasks. Some researchers maintain that form-focused tasks (controlled communicative output tasks) enhance the acquisition of target grammar, while others advocate the importance of using meaning-based tasks (comprehension-based output tasks).

In order to compare the effects of these two kinds of tasks, an experiment was conducted with a group of university students. The results indicate that communicative output tasks are more effective than comprehension-based tasks in the teaching of grammar.

日米安保条約の延長と朝日新聞

—社説にみる日本防衛論(3)—

水 野 均

『朝日新聞』は1970年における日米安保条約の延長問題について、「ベトナム戦争での米軍の在日基地使用や核持ち込み疑惑等、安保条約に対して世論の抱く不満を解消すること」を条件に同条約を容認するという姿勢で臨んだ。具体的には、日本の対米軍支援が行き過ぎないように警鐘を発する一方で、世論や安保条約反対勢力には安保条約の廃棄を求めるような運動を沈静化するように務めた。これは、安保条約の自動延長及び1972年における沖縄の「核抜き・本土並み」返還をもたらすこととなった。

しかし、「極東」の範囲、「事前協議」の対象、「非核三原則」の実効性等、安保条約上の問題は曖昧なまま残った。その結果、「日本が対米防衛を明示しないまま米国に対日防衛を依存する」という構造を残したまま、日米安保条約は期間と適用地域を延長することとなった。

〔研究ノート〕

趙元任訳・中国語版 *Alice's Adventures in Wonderland*

における言語遊戯について

石 毛 雅 章

ルイス・キャロル (Lewis Carroll) の『不思議の国のアリス』 (*Alice's Adventures in Wonderland*) をはじめて中国語に訳したのは、言語学者の趙元任 (Chao Yuen Ren; 1892-1982) であった。留学先のアメリカで『アリス』を知った元任は、たちまちその魅力にとりつかれ、みずからの手で翻訳を試みる。天分の語学力とユーモアのセンスを活かしたその訳は、キャロル研究家ウォーレン・ウィーヴァー (Warren Weaver) に大いに賞賛されるものとなった。本稿では、元任訳で特に優れていると評された言語遊戯の訳について、訳者の果敢な挑戦ぶりを検証する。

Some Notes on Descriptions of Usage and Meaning in Learners' Dictionaries

YAMAZAKI, Satoshi

The use of corpora has made significant contributions to the compilation of learners' dictionaries of English in recent years. Among them are no doubt more accurate descriptions of the uses and meanings of words and phrases. However, there seem to remain problems in such areas as descriptions of less frequent linguistic items (in corpora) and the treatment of shades of meaning of a word, which may pose difficulties to corpus analysis/lexicography. Four such problems are pointed out and possible suggestions are made in this note. These points are: (1) the explanation of expressions of saying goodbye, (2) the treatment of the transitivity of *rummage*, (3) the description of the meanings of the nominal use of *pigeonhole* [*pigeon-hole*], and (4) the description of one of the meanings of the verb *produce*, i.e. 'show or present something'.

アルネ・ネスの環境哲学

—ディープ・エコロジーとエコソフィー—

若林明彦

1960年代後半から1970年代にかけて環境問題に取り組む思想は人間中心主義から人間非中心主義、つまり環境主義へと転換した。後者には様々な思想が含まれるがその中でもアルネ・ネスが提唱したディープ・エコロジー運動は思想だけでなく実際の環境保護運動にも大きな影響を与えた。本稿は、ネスのディープ・エコロジーの概念及びそれを基礎づける彼の環境哲学を概観するものである。彼は、人間中心主義的なシャロー・エコロジーに対して生命圏中心主義、生態系中心主義としてのディープ・エコロジーの原則を、それがどのような思想を持つ者でも同意できる八項目のプラット・ホームとして提起する。そしてそのプラット・ホームがどのように究極的規範から合理的に導出され、どのように環境保護のための実践的規則へと合理的に展開されるかを示す「エプロン・ダイアグラム」という図を呈示することによって、ディープ・エコロジー運動がいかに根源的かを示す。また、プラット・ホームを導出する究極的規範は、同一のものである必要はなく、各自がそれを宗教や哲学に求めてもかまわないとされる。そこでネスは、「自己実現！」を究極的規範とする彼固有の環境哲学「エコソフィ T」を展開する。それ

は、利己主義的な自己 (self) の枠組みを突破して行き、最終的には生命圏全体を包括する自己 (Self) にまで自己を拡大することを意味している。